



世界農業遺産
「にし阿波の傾斜地農耕システム」



HP



Instagram



YouTube

令和4年3月発行 / 徳島県西部総合県民局農林水産部・徳島剣山世界農業遺産推進協議会

令和3年度 世界農業遺産「にし阿波の傾斜地農耕システム」
高校生「聞き書き」作品集



～ 目 次 ～

◇作業歌が紡ぐ高地の暮らし

P02～

話し手 高木 一永 (つるぎ町半田)

聞き手 喜多 輝 / 武田 一花 (徳島県立脇町高等学校 普通科2年)

◇「亥の子うた」が紡ぐ農業

P07～

話し手 西岡田 治豈 (つるぎ町貞光)

聞き手 谷 奎汰 / 仁木 海道 / 小田 恵里 / 金川 祥子 / 木村 汀菜 / 富岡 祐生希
(徳島県立脇町高等学校 普通科2年)

◇みんなでつなげていくもの ～ヤツマタを中心とした雑穀の継承～

P12～

話し手 杉平 美和 (三好市東祖谷)

聞き手 川人 すばる / 田野 温大 / 峯本 真由子 (徳島県立池田高等学校 探究科2年)

◇まあくんの生きがい ～山の楽園暮らし～

P18～

話し手 木下 正雄 (東みよし町東山)

聞き手 岡部 新大 / 仲村 真奈 / 山口 佳乃 (徳島県立池田高等学校 探究科1年)

◇多少の浮き沈み それも人生 ～^{やまんと}山人の里で^{ひやくしやう いっ き}「百笑一起」の想いと共に～

P24～

話し手 久保田 正和 (美馬市美馬町)

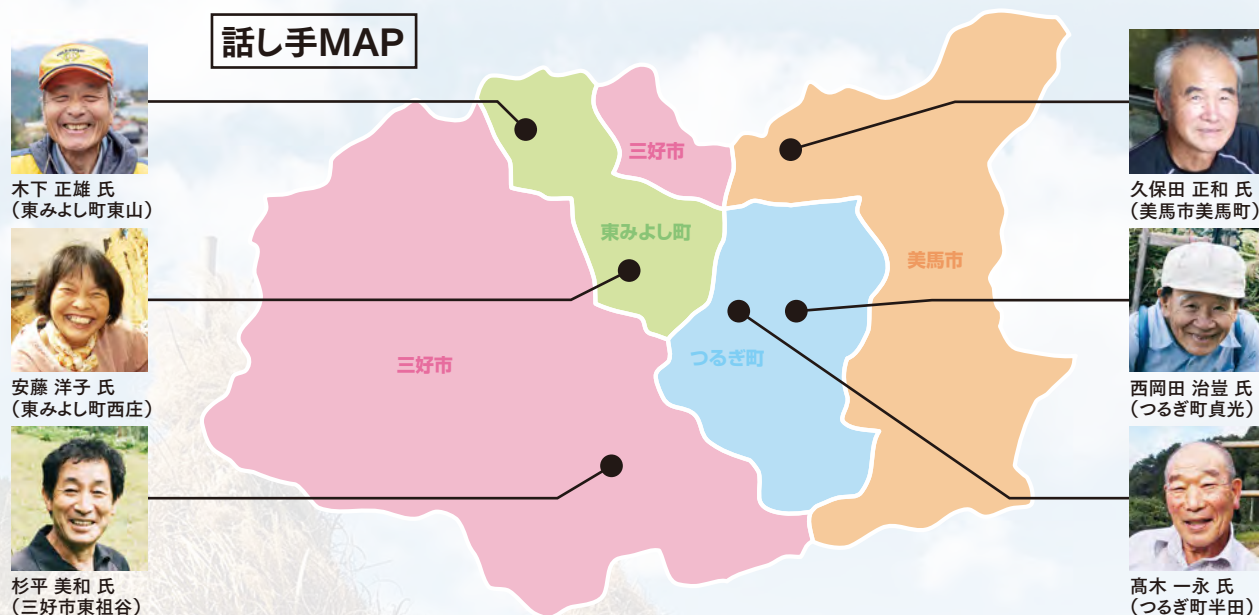
聞き手 秋田 紋花 / 藤河 千智 / 森 花音 (徳島県立池田高等学校辻校 総合学科1年)

◇みんな大好き安藤さん

P30～

話し手 安藤 洋子 (東みよし町西庄)

聞き手 桑岡 優李 / 美馬 李音 (徳島県立池田高等学校辻校 総合学科1年)



～にし阿波世界農業遺産に関する高校生「聞き書き」事業～

地元の高校生が、「徳島・にし阿波 食と農の名人」に、その技や知恵、地域に対する思いを「聞き書き」の手法を用いて取材・記録しました。事業の実施にあたっては、令和3年8月2日・3日・6日に第1回研修会(事前研修)、令和3年11月25日・29日、12月2日に第2回研修会(文書整理研修)を各高校で実施しました。

「徳島・にし阿波 食と農の名人」とは？

傾斜地農耕や伝統料理等に卓越し、食と農の分野で活躍している者を徳島県が認定。「名人」の知識・経験・技術等を次代への継承のために指導・実演いただくとともに、情報発信に協力いただいている。

「聞き書き」とは？

話し手の言葉を録音し、一字一句すべてを書き起こしたのち、話し手の語り口で一つの文章にまとめる手法。「聞き書き甲子園」(主催：農林水産省、文部科学省、環境省等)でも用いられている。



「作業歌が紡ぐ高地の暮らし」

高木 一永(美馬郡つるぎ町半田)

聞き手：喜多 輝 / 武田 一花(徳島県立脇町高等学校 普通科2年)

自己紹介

昭和18年1月2日。1943年。78歳半じゃな。もう半といわん、過ぎたのう。もう10月じゃきに11、12とあと2か月じゃきに。78歳10か月じゃ。兄弟は、おらの兄弟5人おるんよ。

うちのお母はん(妻)の兄弟は7人。そういうおらの兄弟は今徳島におるんと、大阪に妹がおるんと、徳島に弟が2人おる。一人は電気屋、一人は大工で現役で頑張っとる。

おらは長男でな、徳島に長女が嫁に行っておった。うちのお母はんの兄弟が岡山に何人かおるんよ。それも出稼ぎとか、そういうのが縁で、あっちいって見初められて結婚したきに。



半田に残る理由

やっぱりこの土地とかこの家を無くしたくないという親の気持ちを汲んでおるようになったんじやろうと思うんよ。

親父がおらが若いときに死んだけんな。親父がおらんようになったらここ守らないかんけに、しょうことなしここで頑張んりよって。一種の宿命というか、そういう感じじゃの。



数匹の猫と犬と暮らす

岡山への出稼ぎ

冬場はこっちに仕事がないけに土方に行くとか、大工に行くとか。岡山に行くのは、岡山のほうが忙しい時に行くんよ。

例えば田植えと、麦刈りと、それから、い草刈りと、稲刈りとその忙しい時期にいきよったん大勢おったし。こっちでは家の仕事だけでは銭にならんもんじゃきに、よその仕事をする事で日当が入ってくるじゃろ、そういうのが出稼ぎなんよ。

幼少期

おらは勉強好きではなかったなあ。勉強は嫌いな方じゃきに。仕事…勉強よりはむしろ仕事。仕事が好きっちゅうことはない。仕事はせざるをえんけんしよるだけでな、誰も今でも仕事が好きっちゅうことはないわ。せざるをえんけんな、生活のためにしよるだけじゃきに。好きでしよるんちゃうん。

鶏飼うても鶏が好きでしよるっちゃんとはちがうん。生活のために仕事しよるだけで。畑の仕事じゃって、畑があるけに木植えたり漬して畑をなしにするのがもったいないきんと思て、できるというんでしよるだけ。ほなけに、好きでとか面白うてとかいうのはあんまりないなあ。



ゼンマイの作業

高地での暮らし

本業が今んとこ養鶏でな、昔はこの養鶏業をする農家が40年ぐらい前は20戸以上あったんじゃけどな、今はもうたった4戸になっとる。もう皆年が寄って、体力が着いていかんようになって廃業した人がほとんどじゃ。んで、この次にやめる可能性が高いのはおらが高い。今満78歳。まあ一応元気なんじゃけどな。寄る年波には勝てんけにそこそこ筋肉が弱ったりはしよる。あとは、このごろはいとこと12、3人グループで、柿茶にする柿の葉と漢方薬にする柿の葉の収穫をする仕事。専門の加工会社があって、そこへ毎日出荷しよる。そういう仕事とかな。ほんで、鳥飼をしよるけにここで飯が食うていける、という生活なんよ。畑の作物ではとても収益が追いついていかん。

高地暮らしの不便な点と長所

この場所で不便なんは大雪の時だけやなあ。雪が降ったらおらが掃除せな誰っちゃせんよ。男衆の動けるのがおらんけん。ちやうどうちにはショベルの機械があるけんな、それをもってずーっと掃除していくんよ。

よかったなっていうのもはあんまり無いなあ。ええことは当たり前になっとるし。まあ、ここはそこそこ風も当たるしなあ。台風が来たら心配ないんよ。雨が降ったけんって避難をせえせえ言うたって、避難所の紙屋小学校に避難しよるうちに遭難するわ。ええっていうのはまあ、煩わしいというほどでもないし。人口が減って鶏飼うても臭いとか汚いとか言われんということぐらいはええかもしれん。

最近楽しかったことや楽しみなこと、趣味

作業歌もそうじゃけんど作業歌より以前に、お盆には廻り踊りっていう踊りをずっとつるぎ町内でしよったんよな。くりあげ音頭っていうのを40何年。

かれこれ50年かぐらいやとった。それが楽しみといえは楽しみ。けど、それがコロナのおかげで全部中止になっしょうたけに、このごろカラオケも酒飲みも、コロナでいかんっていうやろ。ほなけん楽しみいっちょもないんよ。



作業歌を歌うタイミング

「草肥え刈り節」というのはカヤを刈るときの作業歌としてしよったん。

それからカヤを乾燥して運ぶんじゃけど昔は全部背中運ぶけん。大勢でしよと誰からともなく「荷運び歌」が出ると、そういう感じじゃな。

作業歌の内容

これはカヤを刈りながらするのでな、「肥のかりおき娘の見おき」他には「あると思えば楽しみよ」とかな、「高い山には霞がかかる 器量のよい子は目にかかる」とかがあるんじゃ。

カヤを刈ってコエグロ(秋に刈り取ったカヤを束ねて円錐形に積んだもの)にして乾かしてそれを山から家まで運んで牛の餌や牛の寝床になったり畑の敷き草にしたりな。コエグロにするカヤを刈って、これを次に運ぶときの歌がある。

これはおおぜい手間がえで何人もが並んで担いでずっとこう走る。昔はこの上の杉やぶが皆草地じゃった。そこらで刈った肥えを担いで出てそこの畑の横の道の勾配が歌のリズムとるのにちょうどええんよ。

道も広いし通りやすい。それをこうひょいひょい……と走れるところへ出てくると歌が歌いとうなる。そのときの歌で一番ポピュラーなのはな、「山は焼けても 山鳥や飛ばん かわいい我が子に引かされて」と「山の中でも一軒家でも住めば都 我が里よ」こういう歌詞がある。

作業歌の始まり

ここの土地が何百年くらいになるんじやろうの。100、200年もになるじゃのうかなあ。

ここいらの土地をどういう風に開発したかっていうのはよう分からんけん。百何十年ってとこちゃうで。

作業歌の効果

そりゃあ、やっぱりこの谷あいというか近くで大勢のときには若い者も大勢おり、娘も大勢おりするもんじゃけん、若いしが向えて草刈りをしよる娘に聞こえるように大きな声で歌うとかな、そういうのが楽しかった。

今はそんな人間がおらんもんじゃけん、やれば独り言のようになる(笑)

機械化に伴う作業歌の変化

基本的には変わらんのじゃけん、どの歌でも十人十色の声じゃし、その人なりの節じやろうしな、一概には言えんけど。ほんで、エンジンが鳴んりよったら歌を歌えんで(笑)全然誰っちゃんに聞こえんけん。鳥飼いよったらちよいちよいやんよったけん。



廻り踊り



色々と丁寧に説明していただいた

岡山出稼ぎ時代に行った岡山にも作業歌はあったのか？

無い。無い。出稼ぎに行つとった岡山にはなかった。

ああゆう平地にはないんじゃな。こっちでもなあ、人間が大勢おって手間がえというてからに、順番に今日はうち、明日は隣のという風にな、手間がえというんで仕事をわんくだけでなしにしよったんよ。人が大勢になると歌うとうたり。

歌うことでリズム取るとか、せこさを紛らわすとかな、そういうことじゃろうと思う。

作業歌の文献

だいたい半田の町誌に残しとるんよ。ほなけんその歌詞やば文字で残るけん、節やはテープかCDかに残さんことには残らんわな。それを今度は誰かが受け継いで歌って広めてくれるしかないわな。

作業歌の継承

作業歌を受け継ぐのは音頭を受け継ぐのと比べて尚ないな。こういうのに関心を持ってくれる人が増えてくれるといいんじゃけん。なかなかおらるも披露をする場というのもあんまりないしな。そういう作業歌とかを聞かす企画をしてくれる人があればじゃけん。

かううじて音頭やは今年まで何年か止まっとるけん、残つとんよ。コロナさえなしになったらまた復活するかもしれんけん。復活さすのにはそれなりのお金もかかるし手間もかかるし。それと地域的に関心が高まってこんと難しいし、誰かが先に立ってそういう企画を立てんとできはせん。じゃけん。なんでも一旦やまったらな復活は難しいんよ。



家の裏側に広がる畑

作業歌に対する想い

できたら大勢がおる場で聞いてもらたり、代を継いでもらたりできたらそれに越したことはないんじゃけどな。人口が減ってくると… どうにもじゃあないなあ。

ほなきに中学校でも高校にでも行って歌を披露して、そういう中から興味を持ってくれる人がおるとありがたいけん。

だれでも興味があつて教えて欲しいって人が出てきてくれたら嬉しいんよ。やってみたい、やりたいとかな、そういう人が出てきてくれたらじゃけん。こういうのはやりたいていう気持ちがある人でしか長続きせん。おまえやってみい言うんではな、みな消えるんよ。おらがやりたい!っていう人やつたら残るんよ。

残るぐらいの実力もいるしな。熱心さもいるし、気長にへこたれずにやらなんたら。おまはん興味があるわけじゃろ? 研究しようという気になつとんじゃけん、一番貴重な存在じゃわ。

あとがき

人口減少や人口流出が作業歌などの伝統文化に大きな影響を及ぼしていることを痛感した。まずは伝統文化の現状を知ってもらふことがこのような伝統文化を継承していくための第一歩だと思った。インターネットの普及で世界中の人とつながることのできる現代だからこそ、作業歌を含めた地域のPR動画などをSNSなどに投稿したり伝統文化をまとめたサイトを立ち上げたりするなど文化継承の橋渡しができるような役割を担っていきたい。

[取材日: 2021年8月20日・10月16日]



高木さん夫婦

Profile



高木 一永（たかぎ かずなが）

◇生年月日：昭和18年1月2日

◇年齢：78歳（取材時）

略歴

地域に伝わる「草肥え刈り節」「荷運び歌」など、いわゆる「作業歌」の継承に尽力している。伝統芸能「音頭」の継承にも力を注ぎ、町内外のイベントで積極的に披露し、地域の語り部として、学生等の研究にも協力を惜しまない。養鶏業を営む傍ら、急傾斜地において、ソバやゼンマイ、柿の葉などの栽培にも取り組んでいる。

（草肥を刈るなら 四月草肥を
ほうそ芽立ちの 紫草肥
声が聞こえて 姿が見えぬ
殿は深野の さりざりす
山の中でも 三軒家でも
住めば都じゃ 我が里よ
花よ咲くなよ 蕾でおれよ
咲いて小枝を 折られなよ
山で美味のは 下り豆いちこ
里で美味は 里饅頭
廻わる水車にや 水は張らぬ
稼ぐ浮世にや 苦は積まぬ

草肥刈り歌（草肥刈り節）

（とろり／＼と 駒乗りかけて
春はお出でよ 伊勢さんへ
山で床とりや 木の根が枕
落ちる木の葉は 夜着となる
鳥はばら／＼夜はほのぼのと
明けりや鳴るぞよ 寺の鐘
山は焼けても 山鳥や立たぬ
可愛い我が子に 引かされて
人は良い／＼何処から何処へ
乱れ車で 我が悪い
山が高うて 殿御が見えぬ
殿ご恋しや 山憎い
若い時こそ 立つのも花よ
立てておくれよ ここの名を

荷運び歌

作業歌 半田町誌 下巻 経済・文化・民俗
昭和五十六年三月二十日 発行 より引用

◆ 取材を終えて ◆

今回の聞き書きを通して、改めて伝統文化のある現状を知り、文化継承の難しさを痛感しました。

実際に作業歌を歌いながら作業するのは難しくとも、作業歌というのがあり、それが作業へのモチベーションを保つことに役立つことや、作業歌といっても歌い手によって十人十色の作業歌になることを継承したいと思いました。また、聞き書きをして、いかに話し手が話したくなるような聞き方ができるかが大切だと思った話し手の特徴が読み手に伝わるようにまとめるのが難しいと感じました。

（武田 一花）

昨今の感染症で人と直接会う機会がはばかれる状況の中、名人の家を訪れ、対面してお話を聞けたことは貴重な経験になりました。

直接の会話はよりリアルに物事を伝えてくれ、同じ徳島に住んでいても知らなかった文化や伝統の違いを肌で感じる事ができました。

今回私たちの訪れた地域は、人口減少により過疎化を避けられません。私は将来マスコミ業界に就職したいと考えているので、地域の魅力を大きく発信し、同様の地域を救えるようにしたいと思いました。

（喜多 輝）



左から 武田 一花 / 喜多 輝

「亥の子うた」が紡ぐ農業

西岡田 治豈（つるぎ町貞光）

聞き手：谷 奎汰 / 仁木 海道 / 小田 恵里 / 金川 祥子 / 木村 汀菜 / 富岡 祐生希
（徳島県立脇町高等学校 普通科2年）

自己紹介

「にし阿波の傾斜地農耕システム」は2018年8月にFAO（国連食糧農業機関）の世界農業遺産に登録された。

その傾斜地農耕システムを支える名人である西岡田さん夫妻にインタビューを二度実施し、様々なことを教えていただいた。



右：西岡田 治豈（にしおかだ はるき）さん / 左：西岡田 節子（せつこ）さん

名人の経歴は？

生年月日は昭和16年（西暦1941年）の3月12日です。出身は生まれた時からここです。ほんで子供は3人です。兄弟は姉が1人おる。生まれた時からです。農業はもう今年で60年になるんです。

毎日の暮らしは？

作物にあわせてするけんね。ふつうは朝6時ぐらいに起きて7時半から畑に出て行って夕方まで。その間に3時とか10時とかの一番はお茶を持って行ったり。あんまり休みとかはないです。雨が降ったら家の中の仕事が待ちよるから。



急斜面の道のりは大変

栽培する農作物は？

今はソバとキヌサヤ、エンドウ、インゲンとかジャガイモとか植えてます。昔はタバコが主でムギ、ソバとか、サツマイモや色々植えてたんです。タバコを作らんようになってからは作物に切り代わってソバが主に、違うところには、シシトウとかゴボウとか里芋とかを植えとんです。

あと大根のはりはりを作っとんです。細うに切っとるな大根を千切り大根っていうんよ。夏に大根がないときにお煮しめにやできるように藁に通してかけるんよ。そしたらなゼンマイとかな、あんなんも保存するんよ。そば米が一番保存食やけんな。

傾斜地での農業のメリットとデメリットは？

平らな所だったら機械がほとんど出来るけど、こっちはほとんど人力やけんな。作物を作って収穫する時に、腰屈めずに上向いて取れるっていう。

あと傾斜があるけん水はけも風通しいいけん平坦な所よりも作物がようできることもあるんです。

ソバや風通しが良くなかったら実がならんの。平坦な所は水が溜まったら根腐れするけど、ここは水はけがいいけん根腐れがいかんの。日当たりもいいです。日光が8時半ごろから2時半頃まで冬でもよう当たるんよ。

冬は寒くて雪も降るときは40cmぐらい積むんです。でもここは日がよう当たるけん消えるのが早いんです。タイヤでふみしめて固まったら消えんけど。お日様がよう当たったら作物が甘くなるんです。



傾斜地の農業には欠かせない道具

苦労したことは？

台風が一番いかんのです。作物をどんなに傷められるかわからんのです。あと鳥獣被害です。すごいんぞよ、サルは。畑に玉ねぎをようけ植えたのに一本も残さず全部食われた。きれいに皮をむいて食べるんよ。茎がちょっと出たら食べて、また出てきたら食べる。ほれも一匹や二匹ならまだしも集団で来るんです。何十匹も。子連れのサルは怖い。子供を取られると思って追いかけてくる。サルでも噛むんでよ。あとは鹿もすぐ側まで来る。

イノシシは土を掘りながらずっと下まで掘って食べていくんです。里芋やジャガイモが好物で畑に入ったら全部食われる。雀とか鳩は来たらソバの種を掘り起こして食べるんです。

コロナの影響は？

あるなー。いろいろ商品にして出しよるけど出入りが少ないから売れ行きが。



傾斜地での農業

気候変動の影響などは？

最近気温は高いけど雨がちょこちょこ降ってくれたら何とか気温が高くて何とかなるんです。それよりも雨が続く方が困るんです。

お亥の子さんとは？

五穀豊穰言うて作物を祝う行事で、昔は家々をまわりよったんです。ほなもう子供おらんようになったきに廃止になった。縁側でトントン叩いて10まで数える歌なんよ。

これを近くの小学6年生まで歌ってたんよ。そしたらお菓子をあげるんよ。お亥の子の日は昔からきまっとって、子供が来るけんみんな待ってたんよ。一軒一軒。そこいらに分校があって、先生が気を遣って「お亥の子の日」には昼から休まして家々回りなさいって。だから昼から給食食べて行くんよ。生徒は。そしたらみんな待ってくれてるんよ。家の人がな、あげないかんて、だからお菓子いっぱいもらってくる。

今の貞光小学校の子が来るけどリュック背負ってくるけんいっぱいになる。重たいうて言いながらいぬ人がおる。お寿司いつくれるのかって聞いてくる。みんな先輩に聞いてな。みんなきちんとして手を洗ってちゃんとしたらあげるよって。

3年生が楽しみやって。2年来れなかったけん。みんな来れんかった人が悔やむって。先輩はみんな来てるけん。3年生って決めたんよ。「お亥の子の日」はみんな楽しみにしているんよ。でも歌を覚えられないから先生大変らしいよ。

子供はすぐに覚える。お礼の手紙もくれるけど、みんなきれいに書いてくれる。5つもある。一つ一つきれいに書いてくれるんよ。上手に書いとる。3年生も。高校生や保護者も。



お亥の子の日

やりがいを感じることは？

大勢の人が来てくれて「良かった」って言うてくれるのが一番やな。風通しがいいけん案外作物がよう育つ。ほんでいつも朝畑行ったらな、作物に「おはよう」って挨拶するんよ。ほいてな帰ってくる時には「もう帰るけんな」って言うて、「大きいなりよ」って作物に言うんよ。「また明日も来るけんなあ。」って言うて帰るん。作物にも感謝しとったら収穫が違うんでよ。

作物が綺麗に育ってくれよったらうれしいでな。ひとり口から出るんよ。ほかの人はみな誰っちゃほんな事言わん言うんやけど、私は毎回行ったら挨拶するんよ。ほしたら気持ちがいい。昔と違って今は美味しいもの何でも食べれるのにな。

やっぱり人間なんでも感謝せないかんでなあ。作物やって自分の力で一生懸命成長してくれよんのに。

どのような人に、この傾斜地農業を続けて欲しい？

作物作りよったら、意欲が湧くんです。側からは同じことをしよるように見えるけど。作物の種まいて、成長を見守って、育てて、収穫になって、実がなってくれたら大変嬉しい。

そんな気持ちはあるんです。ほんで、たくさん取れて、皆さんに収穫した穀物を喜んで食べて貰えたら嬉しいし、作るのは楽しいんです。

途中で台風とか被害がある場合は困るけれど、まあ作って実がついてくれたら作んよる農家にとっては1番嬉しいです。



ごちそうを撮影

この農業を後世に伝えていく上で、
どんな人に伝えていってほしい？

まあ、農業来てくれたら、だいたい皆さん育てる意欲が湧いてくると思うんです。ほなけん、もう作るのに接してくれたらわかると思うんです。作り出したら、もっとええもの作らないかん、もっと食べやすいもの作らないかんっていう気持ちになるんです。

[取材日：2021年8月23日・11月14日]



記録写真の説明

Profile



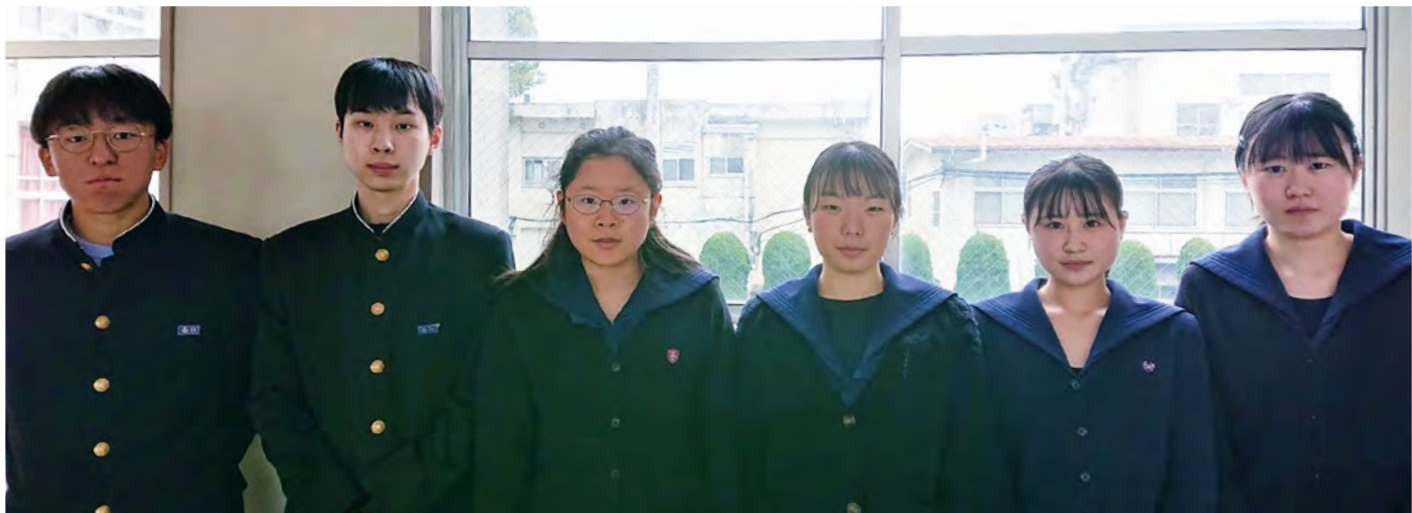
西岡田 治豈（にしおかだ はるき）

◇生年月日：昭和16年3月12日

◇年齢：80歳（取材時）

略歴

傾斜約30度の傾斜地で農産物を生産し、そば米、干大根等の加工販売も行っている。観光農園として一般開放されているソバ畑は、傾斜地農耕システムのPRの一翼を担っている。五穀豊穡を祈る伝統行事「お亥の子どもさん」行事を復活し、継承に尽力するとともに、歌詞を郷土色豊かにアレンジし、文化の学習に貢献している。



左から 仁木 海道 / 谷 奎汰 / 富岡 祐生希 / 金川 祥子 / 木村 汀菜 / 小田 恵里

◆ 取材を終えて ◆

聞き書きの活動を通じて、活動前の「農業＝地味な作業」という見方が一変しました。名人の体験談や、そこから興味を持ち自分でも調べてみて、傾斜地という一見ハンディに思える農地で代々受け継がれている伝統的な技、作業効率や収穫量を増やすための工夫を知って、この農法を後世に伝えていかなければならないと思いました。この活動に参加したことで農業のすばらしさや奥深さを改めて知ることができました。

（仁木 海道）

今回の聞き書き調査では、名人さんの思いや傾斜地農業の大変さ、生きがいについて知ることができました。にし阿波の現地に行ってみると、私が想像していた以上に広く、傾斜も急で、名人さんがいかに大切に作物や畑を手入れされているかを感じました。にし阿波の傾斜地農耕システムは私たちの誇る世界農業遺産であるので、しっかり学びつつ、さまざまな人に魅力や特徴について発信していきたいです。

（富岡 祐生希）

これまで触れたことのなかったにし阿波の魅力を身近に感じられるいい機会になりました。私は美馬市民ではないため、初めて聞くことや見ることでばかりで、発見の連続でした。西岡田さんにお話を伺い、本当に自然を大切にされているのだと感じました。私たちが生活する場所は自然が溢れているにも関わらず、その良さを見落としがちです。自然や地域の伝統について知り、伝えていきたいです。

（木村 汀菜）

にし阿波の傾斜地農業について詳しく知ることができました。実際に畑に入らせてもらったところ、想像以上に傾斜が急で驚きました。雨風による土壌の流出や機械が使えない等の傾斜地ならではの問題も伺いました。二回目にお宅を訪問した際には、収穫したそば米を見せていただきました。加工される前のソバは初めて見たので印象に残っています。二回ともそば米雑炊をいただき、香りがよく非常においしかったです。

（谷 奎汰）

初めは聞き書きを作品としてまとめられるか不安でした。しかし、実際に現地に足を運び、名人から直接お話を伺ったり、郷土料理であるそば米雑炊をごちそうしてもらったりと貴重な体験をさせていただくことで、この地域の優れた農業をそのまま伝えたい、という思いが強くなりました。名人をはじめ、たくさんのお会いと知識を得ることができ、自分の大きな財産になりました。ありがとうございました。

（金川 祥子）

今回の調査を通して、徳島県の伝統的な農業について詳しく知ることができました。西岡田さんのお宅に伺って、傾斜地農業の大変さや楽しさ、すばらしさを学びました。昔はタバコの栽培、現在はそば米や、はりはり大根などを栽培されています。ご自宅の野菜を使って料理を作ってください、すごく美味しかったです。特に印象的だったのはそば米雑炊です。今まで全然知らなかった伝統に触れることができて良かったです。

（小田 恵里）



みんなでつなげていくもの ～ヤツマタを中心とした雑穀の継承～

杉平 美和(三好市東祖谷)

聞き手：川人 すばる / 田野 温大 / 峯本 真由子 (徳島県立池田高等学校 探究科2年)

杉平さんの紹介

職業は、三好西部森林組合の契約職員で林業です。一応60才で退職しています。農業は、休日にしよるけど仕事としては林業が中心ですね。学校を卒業して大阪の方へ出とって、昭和54年にこっちへもんで来て今の仕事に就いた。休日、若いときは遊びよったけど、ある程度年が行くにつれて、畑の手伝いとかをするようになった。現在、祖谷雑穀生産組合を平成28年に設立して、皆と一緒に畑をしています。

今は妻と二人暮らしで、すぐ隣に自分の母親が一人で住んでいます。子供は二人で、三好市内と他県に住んでいます。

祖谷雑穀生産組合

当初は9人で設立し、今は組合員20人と、商品開発部の女性3人がいます。下が60才くらいで上が88才になるきに平均で60才代後半ぐらいかな？第一線を退いた人で活動してるんで。我々のメンバーが20人おるけん畑を持ってない人もおって、イベントとか飲み会の手伝いをしてくれている。メンバーで畑をしよるのが15人。ほんで、雑穀やごうしも、コンニャクを作とる。シコクビエは我々のところだけで栽培、

ソバはメンバー以外の人も何人か作とる。栽培規模は少ないけど30軒ほどかな？しかし、5年～10年後はほとんどがやめてしまう気がします。皆な高齢になり畑ができんようになってしまった。

当時、世界農業遺産の取り組みをしよったし、東祖谷で雑穀っていったら、ヒエ、アワ、タカキビ、コキビとかあるんじやけん、その中にシコクビエっていう、祖谷ではヤツマタって言うんよ。それを東祖谷で1軒だけ生産しよった人が高齢でやめるということを聞いて、我々でヤツマタを引き継いでいかないかんということで種をもらって、祖谷の昔からある雑穀の在来種の保存と伝承、雑穀を使ったいろいろな食べ物、雑穀食文化を若い人に継承していくために作ったのが始まりです。

そう、雑穀の保存や継承をしていかなんだら祖谷の在来種が消滅してしまう。

誰かが、毎年雑穀の種を蒔いて育てて種を取っての繰り返しを続けていく必要がある。

先祖代々受け継いだ農業

機械がは入らんとこは全部人力で耕す。クワで掘ってするんで、結構な力仕事になるんで、年いったら身体が続かんようになって畑を捨ててしまう。若い人がいない所は畑がだんだん無くなっていく。我々も急傾斜地は力やを生やして力や場にして、比較的緩斜面で作っていきよる感じ。傾斜地の畑を維持していくのは大変で苦労がかかる。利点はなあ、水捌けがええんと祖谷は標高が高く昼と夜の寒暖差が激しいので雑穀作るのには向いとる。作物によったら、おいしいもんができる。なんでこんな所でしよるんでって言われたら、先祖代々畑を守り続けてきたことかな。

今、三好市でジオパーク構想をやっているやろ。ここら辺も全部、昔、山が崩壊した跡に人が入ってきて崩れた岩を集めて積み上げ屋地を作って家を建て、その周辺を田畑にした。普通だったら畑も石を積んで緩くするんやけど、斜面を全部使うことで、利用する面積が広がる。そのままの状態だったら土が流れ出る。土を流さないように力やなどを土に混ぜたり、下の土を持ち上げたり、長い年月を掛けいろいろな工夫をしてきた。

そういう、先祖が苦勞し作ってきた田畑、まあ田んぼは無くなったけど、畑を放ってしまうっていうのは先祖に申し訳ないちゅうか。そういう使命感で皆な守ってきたと思う。利益を求めんやったら傾斜地でやるのをやめて、平地で大型機械を使ってやらないと無理です。地域を守る気持ちが祖谷に住んでいる人は強いと思う。子供は学校を卒業してそのまま都会で就職して出て行くので、畑を作りたいけん、後継者がおらんので、どうしようもないというのが現状です。



ソバ畑の様子

商売下手な地域

昔から東祖谷の人は、作った物を売るんじゃないであげる文化なんでよ。親戚に配ったり、近所に配ったりだとか、訪れた人にあげたり。商売とかではなく、物々交換的な文化が今も残っていると思う。

昔から東祖谷の人は難儀(苦勞)して暮らしてきた人ばかりなので。皆なで助け合って、少ない物でもみんなで分け与えてきた、そういう習慣がずっと続いてきたから商売は下手やな。人情は人一倍厚い。今はな、畑を続けたいけど高齢でどうしてもできない。それとな。もうひとつ、昔は鹿とか猿とか獣害が無かったんやけど、ここ十数年以上になるかな。畑を全部、柵で囲わないと作物は作れなくなった。そんなことで、だいぶやる気を無くしている人が多いのかな。

昔は、ここら辺一帯、見渡す限り畑で近くに木とかは無かった。食べていけないかんきに、どこの家でも作れる所は全て畑だった。昭和30年代とか40年代とかは自給自足の暮らしで、唯一の換金作物と言えば葉タバコ。久保集落でも葉タバコを盛んに栽培していた。この頃が東祖谷でいちばん畑が多かった。

小さい時はな。子供は勉強より家の手伝いを重視されていた。夏休みは葉タバコが最盛期で、子供達の手伝いよったんよ。どこの家もな。だから、勉強せえと言う言葉は聞いたことは無かった。仕事せばかりだった。だから夏休みはない方がよかった。早く学校に行きたかった。家にいたら使われて使われてするからね。今辛抱強いのはこの頃の体験からきとるんかも。葉タバコが終わったらソバを蒔く。一面のソバの花がきれいだったなあ。とにかく葉タバコは大事にしよったねえ。まとまったお金と言えば葉タバコを専売所(旧専売公社)へ



ソバの花

納付した時ぐらい。その当時はね。お金の支払いも年に1回の支払いでいけたきに。店もすべて、ツケで買えた。専売所で税金から店のツケから一年間分払うときに、家に帰ってお金はほとんど無かったんだよ。

傾斜地では雑穀の生産性が上がらんきに、それを加工品にして商売するって言うんで、地元でいろいろな商品開発をしとんじゃけどな。以前日帰りツアーがあったんじゃけど、あんまり利益につながらんしね。ちゅうんで、するんだったら東祖谷の古民家等で宿泊をしてもうて、雑穀の栽培や収穫、観賞、雑穀料理を食べたり作ったりする体験をセットにした企画をしたいと活動をしようんじゃけど。

祖谷は結構、観光で有名なんじゃけど。今は大きなホテル等で泊まって、祖谷の方へ入ってきて観るだけで帰るちゅうんで。東祖谷に住んで維持活動している人には、なんちゃ恩恵がないんで。活動をしている地域の人にちょっとでも恩恵が受けられるような取り組みをしています。

東祖谷の雑穀農家と害獣・自然との闘い

雑穀って昔から祖谷に適しとるんかな。米の代わりに雑穀食べてきよったけど、傾斜地にも適しとるし、作りやすい。種を蒔いて収穫するまでは手作業でやるんでちょっと大変じゃけど。工夫するちゅうたら、風吹いたり雨が降り続いたりした時は倒れるからな。茎を束ねて3株ぐらいを一緒にくくったりしよるんじゃ。支柱しても茎が途中で折れてしまうけんな。

痩せた傾斜地には化学肥料はあんまり使わん。土が硬くなるけん。この辺ではコエ（乾燥させたカヤ）を入れる。そしたら土の中がふわふわの状態になり、腐ったら肥料にもなっりよる。雑穀は痩せた土地でも育つきにええんじゃ。

雑穀に鳥獣害はウサギや鹿、それと鳥だね。鳥は雑穀が大好きなんで。特にアワ、ヒエ、コキビはね。ネットで囲いよったんじゃけど中に入ってくることも、あったきにな。今は、タマネギのネットをかぶしとるんじゃけど。鳥が食べるより先に収穫するか、ネットするしかないね。猿は雑穀は食べんな。ここの畑も去年、市の補助金をもろうて電気柵をしたんじゃ。それまで雑穀以外の物は食われてしもうて、猿の餌を作りよんと同じだった。今はちょっとましなけん。結構対策をせなんだら祖谷では作物はできん。まあ池田も一緒にけん。もうなかなか難しいになってきよる。

ヤツマタパンケーキ

これな。ヤツマタの加工食品パンケーキを作ったやつ。

東祖谷の雑穀の料理はな、やっぱり祖谷ソバ・ソバ米がいちばん多いかな。また、よう使うのは団子と餅かな。ヤツマタは食べなんだけど、ばあさんや親は食べとったそう。我々が最初に栽培した時に、お年寄りに「おまえら、そんなまじもん何で作るん」ってよう言われた。確かに昔の団子はジャリジャリして、旨うなかったそう。そのころは石臼で粉にしよったきに粉が粗かったと思う。今は全然違うよ。これ（粉を指して）で団子作ったら結構旨かったよ。昔は米が貴重なものやったから、食事の前に必ず団子や芋を食うて腹をおこしよった。ヤツマタは、創作料理や雑穀パンなど、いろいろなものに使える。

これが（アルバムを指して）昔のヤツマタ団子、色もこんなに赤黒かった。これが昔の祖谷のうちのちがえ雑煮。正月に食べとった雑煮こんなかったんよ。大きな豆腐とまいも（里芋）だけで腹がおきた。昔の人は今と違って腹持ちのええもんばかりを食べよった。今はな、食も変わってしもうて雑穀は健康食として見直されてきている。今の子供は旨いもんを食べ過ぎるんで、雑穀を食べた方がええな。

結局、ある程度利益をあげていかないかんし。地域に何か出来たらええちゅうか。ほんで、雑穀。幻の雑穀ヤツマタを使うこと。今、収穫量がよう採れて100kg、結構これって人気あるんでよ。ほしい人ようけおるけん。こういう状態（種）で売っても値段的に数十万円なんで、採算がとれない。ほなきん、さっきいよった地元で泊まってもうて、体験する。こういうもんをお土産にしたり、食べてもろうたりしたら利益も少しは上がるし、いろいろな人との交流もできる。付加価値を付けなんだらいかんちゅうこと。



祖谷のうちのちがえ雑煮

その為に昔からの食べもんだけではなく、現代風に食べやすくした商品開発に取り組んで、料理研究の先生を呼んで、ヤツマタの創作料理を試行錯誤して、いろんな商品が出来あがっていきよる。とにかく地域でそういうもんを作って行こうと。まあ、量も少ないし、手作りなので値段も高くせんと利益も上がらんし。ほなから、健康食品として、また、雑穀をどんな所で作りよんか。価値の分かる人に販売している。まあ、東祖谷に来てもらわなんだらな。

ヤツマタの商品を東祖谷のブランド品として売りだそうちゅうこと。どの商品にもヤツマタを入れようと思ってね。ヤツマタは祖谷の固有名詞みたいなもんで学名のシコクビエで呼んでもだれっちゃ知らんのじゃけど、ヤツマタっていうたら年寄りには皆な知っとるきんな。今な、東祖谷の雑穀をスローフード味の箱船に登録するちゅうて、こないだ決まった。そのヤツマタが入っとる。

…ヤツマタパンケーキですか？そうやね。



ヤツマタの収穫



ヤツマタは粒状

雑穀の可能性

雑穀の可能性っていうのは、やっぱりなあ。さっきいよった健康食品、都会では健康食として雑穀が見直されてきよる。それから観光資源のひとつかな。雑穀に触れてもうて、食べてもうて、ちゅうのがいちばんええな。ほなきん、雑穀の里みたいのを作って、傾斜畑と雑穀をもっと売り出したらええんちゅうんかな、祖谷で何も考えんと何日か滞在してゆっくり、のんびり過ごすのも、ええんじゃないかな。

今度な。文化庁のほうから「食文化ストーリー」っていうて、にし阿波地域の雑穀食が文化財保護法に基づく無形の民俗文化財の登録に向けた調査研究があるんよ。雑穀の食文化が文化財に登録されたらすごいだろうなあ。東祖谷と雑穀を売りだすチャンス。それからな。雑穀は痩せた土地でも、どんな環境にも適しやすい救荒作物で、戦後の食糧難の時には全国各地で作られてきた。ほなきんな。これから地球温暖化で気候変動が起きた時の食糧の救世主になるんとちゅうんかな。



ヤツマタとバターのおやつ



ヤツマタのパンケーキ



手入れも気を使いながら

地域を見つめた取り組み

後継者、私の子供も息子二人おるけど、畑せえったってせんです。私も80才までは出来ると思うんで、まあ。それまでには手伝ってくれるでしょう。

これから定年も65才まで延びるけど、第一線を退いた人が、農業とか、地域を守る活動に加わってくれたらまだ20年ぐらいは継続出来るんじゃないかな。今は下の世代じゃなくて、同年代の仲間が増えてくれたら、ええなと思う。若い人に畑やれったって、収入がようけ入ればやる人もおるけん。こういう山間地で畑せえちゅうても、苦労するだけじゃ。なかなか若い人がやろうちゅうのは、めんどいことだ。

ほなきんな。古民家等を利用して宿泊体験型の事業をやれば何人かの若い人が東祖谷で生活できるんじゃないかな。ほんで、たまに農業手伝ってくれたらええな。祖谷にも空き家がようけ出来てきよる。どこか空き家を借りて直して、寝泊まりできる施設を無料で貸して、山間地を応援してくれる人がそこで数日滞在して協力してくれたらええなあ。定年した人や、まあ仕事持っとってもええけん。修理するのは行政の力はちょっとほしいな。

ボランティアは、今はな。徳島大学から内藤先生や学生さんがよくきて手伝ってくれています。以前県の支援で国際ボランティアが1週間泊まり込みで農業の手伝いをしてくれた。2回目以降はコロナで中止になった。

それからな。西祖谷山村に鳴門から若い女の子が移住してきとって、その子もよく手伝ってくれる。ほんで今度、東祖谷にも千葉県船橋市から一人、今月の22日に移住して来る子がおってね。それも30代の女の子、祖谷が好きになちゅうてね。そういう子がぼつぼつ増えてきだした。今度、皆なで屋根なおしたり支援するようにしとる。

東祖谷もようけ集落があるんじゃないけん。集落自体いろんな行事が出来んようになってきた。もうちょっと若い人がおったらのうや。今は社会全体がお金で、「もの」で豊かな時代じゃきん。人のつながりちゅうのが無しになってきた。東祖谷でも感じる。昔は貧しかったけん、人が助け合って人情が厚かった。ほなきん、「もの」の豊かさを求めて山間部から都市へと出て、便利な暮らしをする、隣近所の付き合いもせん人がようけおる、そこら辺を変えていっきゃらな。祖谷だけじゃなく、全国各地の山間地域がダメになる。コロナや地球温暖化でいろんな災害が起こるようになってきて、ちょっとは気づき始めた人がある。これは国全体の問題。やっぱり。

小さい頃からの教育がものすごく大事だと思う。学校教育を変えて行けばもう少し良くなるのかも。我々も小・中学生に総合学習の時間で教えているよ。でも、これは難しいな。

まあ、頑張れるうちは我々が頑張らないかん。地域の魅力を伝えないかんしな。住む人が減っても、さっき言った、時々人が入ってきて、観光でもなんでもええけん、そういう交流人口を増やして、今おる人達が協力して、少しでも楽しいに出来たらな。我々は地域の手助けと今あるもんを、なんとか維持していくこと。ほなきんな、これからの若い人に社会を変えていってもらえたらええと思う。

でもまあ、いちばんに我々の仲間がなあ、楽しいになるちゅうのがええな。

[取材日：2021年8月19日・10月16日]



見学中



畑の様子

Profile



杉平 美和（すぎひら よしかず）

◇生年月日：昭和33年3月4日
◇年齢：63歳（取材時）

略歴

地元農業者とともに「祖谷雑穀生産組合」を設立、在来雑穀種の生産及び傾斜地農法の保全を行い、雑穀を活用したイベントの開催や地元在来の幻の雑穀「シコクビエ」の生産販売に力を入れている。地元小学生への傾斜地農法（コエグロ作り等）の指導を行い、次代の担い手育成に尽力している。



左から 田野 温大 / 峯本 真由子 / 川人 すばる

◆ 取材を終えて ◆

私はこの聞き書きに参加するまで、自分が住んでいるところの近くで、地域の農業についてこんなに深く考え楽しく活動している人たちがいることを知りませんでした。今回、杉平さんにお話を伺い、東祖谷雑穀生産組合の活動を詳しく知って、この地域の傾斜地農業に対してさらに興味がわいてきました。山の急傾斜地での農業と聞いて「大変そうだな」と思う人もいると思いますが、この聞き書きを読んで興味を持ってくれる人がいたら嬉しいです。

（田野 温大）

私は課題研究の授業の一環として、東祖谷の杉平さんのお宅にお話を聞きに伺いました。家族のことから始まり、雑穀生産組合のこと、子ども時代のこと、東祖谷のこと、雑穀の栽培・加工・商品化についてなど、さまざまなお話を聞くことができました。レコーダーに録音したものを文字に起こすのは意外に大変で、時間のかかる作業でしたが、とても楽しかったです。この聞き書きを通して得た経験をこれからの生活に活かせるよう努力したいと思いました。

（峯本 真由子）

聞き書きをするまでは、祖谷地方に雑穀を育てているところがあるという曖昧なことしか知りませんでした。しかし、聞き書きを通して、雑穀をどれくらい育てているのか、どういう現状か、どういう味がするのかわかりました。ヤツマタはおいしくないというのを昔の人が言っていたようですが、食べさせていただいたヤツマタパンケーキはすごくおいしかったです。雑穀はおいしいということがもっと全国に伝わって、雑穀が今、危機的状況であることも知ってほしいと思いました。

（川人 すばる）



まあくんの生きがい ～山の楽園暮らし～

木下 正雄(三好郡東みよし町東山)

聞き手：岡部 新大 / 仲村 真奈 / 山口 佳乃 (徳島県立池田高等学校 探究科1年)

自己紹介

昭和23年、1月6日生まれ。もうすぐ74歳。

ここは、傾斜地農業による世界農業遺産の認定地。その山に住んだら、「まあくん」って覚えといて。ここは、東山の内野といいます。暮らすのには最高なところ、生活するのには、ちょっと厳しいところ。この家は、私で12代目。300年以上も、自給自足の生活をしながら子育てして世代交代してきたわけですね。こういう田舎暮らしが、なんでいいんだろう？…というような質問には、これからどんどん応えていきたいと思うてます。

自分が名人っていう自覚はなくて、人並やな。まあ真面目な向上心はある。何かにつけてもそれを突き詰めてこう、やってみようやってみようと思う。まだまだ人生終わっとらん感じやな。傾斜地農業、民宿、狩猟。前へ前へ、新しいことにチャレンジしとる。ボクは長男に生まれたら、ここであとを継がないかんという認識で、高校卒業して、一生懸命お袋とここで農業しよったけど、「このままではイカン！」思て、転々と、いろんな仕事をやってきた。この辺でおったときは、箸蔵にドライブインであつたんじゃけども、ドライブインの支配

人を6年くらいしよった。それから、ボーリングが流行ったときにはボーリング場でも働いて。ほんで、勤めとったその会社が、今度は韓国で縫製事業を立ち上げるっちゅうんで、韓国へも指導に行つとったこともある。

それから30歳ぐらいいかな、子どもができて。子ども4人おるんよ。女、女ときて、どうしても男をこしらえなイカンなつて、男こしらえた。そしたら、それが双子だったんよ。ほなきんまあ、4人おるんじゃけどな。ちょうどその時は、勤めはなんもしてなかったんよ。ほやから、ここで農業しながら、木切ったり山の手入れしよった。山いっぱいあるからな。

山の手入れしながら、独学で「宅地建物取引士」の免許取つて、不動産屋の仕事しながら、34歳から保険業、営業のセールスもやった。定年までね。その頃、経済もがんがん成長しとったから、営業なんかすればするほど、なんぼでもとれた。おかげで、子ども達も、東京とかの大学へやれましたけどね。せこかったけど、子どもの為と思えば、生き甲斐にもなつてたなあ。

60歳、定年になってから、地域や役場の人、いろんな人の力を借りて、今の生業を作ってきた。農協じゃの、森林組合じゃのそんな役員とか組合長しよる間に、あちこち会に行くだろ？それで、「そらの郷」から「民泊家庭」募集しよるよ、でき

んの？…っちゅうんで、広い家あるのに、そりゃ「やっちゃるわ！」ってそんな勢いから始まったんよな。あの時、あれがなかったら、こんなことになってないな。

傾斜地農業の価値観

やっぱり機械化ができんのよ。すべて手作業かつ少量多品種やけん大変よ。大量に生産ができないんで、生業としては大変難しい。販売するにも経費がかかるわけで、大阪に持っていくのに手数料に36%も取られる。ハウスつくつて、高品質なシャインマスカット、メロンとかを作っていく以外になんじゃないかなあ。手元に利益が残ってくるような高価な農産物栽培。雑穀、いも類だけで販売農家の生活は難しい。

ただ、世界農業遺産として見方を変えると、この傾斜地農法が人類史上珍しいもので、この豊かな自然の中にあつて、農作物を含めた自然の移り変わりが、むちゃくちゃ楽しめる。

これを材料にコミュニケーションできることなんかも最高よね。この山の向こう見よるだけでも、春は桜、夏新緑、秋紅葉、冬雪景色とかね、そういう季節の移り変わりで、いろんなことを感じられる、それがもう最高。

世界農業遺産、山の寒暖差みたいな複合的な要因で、「平地の野菜より美味しい！」というの、確かに感じられます。

ボクは、ボン酢とか漬物とかいろんなものを自分で作っている。保存食として、たくあんのぬか漬けでしよ、梅干しでしよ、らっきよでしよ、それからきゅうりの漬物もしとくんですよ。ほれから、干し芋とか、まあトマトも乾燥したり。

これからは、6次産業化を進めていくことが必要と思つて、今まさに、レトルト(イノシシ肉)のジビエカレー製品化に向けて取り組んでる。



自然いっぱいの景色

山の恵み

みんなは、遠足とかで、弁当持っていくじゃん？山で食べたら美味しいと思わなかった？不思議よね。ボくらでも思う。

ボクらの頃は、麦のご飯よね。麦ご飯弁当詰めてつたつて、もうおかずはお味噌だけじゃ。お味噌に入つとる、いりこやつて高かったきんね。大変じゃ。味噌にゴボウついたりニンジンつけたりして食べる。山行て、火焚いてはんごう飯で味噌まぶして。素朴やけど美味しかったなあ。あ、お味噌も各家庭で作んりよるきんな。保存食じゃな。昔は味噌、醤油そんなんも全部作んりよつたきんな。大豆から作つてな。

継承させるなら、昔の知恵を進化させなイカン。ボクは、なんでも、YoutubeやSNSで勉強しよる。農業で言うたら、「シャインマスカット」や「アボガド」も始めたし、最近はずっと、家族用の「どぶろく」やつて、あ〜こんなんしたらできるんかつて、最近、町で推進し始めた「もちもち太郎」で試してみたよ。春のやつ入れたほうがちょっと甘みが出てくる感じで、おいしいかな。今度、すだちも入れてみようと思う。



ヤマガラ



東みよし町内野集落

狩猟・ジビエの真価

獣害が出だしたのは20年前なんです。こっちはイノシシなんじゃけども、20年くらい前から急に家の下までイノシシが出て、作られとる畑全部荒らされだした、この集落すべてが。

これはいかな、誰かが免許取って、守りをせないかん。どんなにしたらいいんぞ？と、県にも問うたりした。ほんでボクも勉強に行って、モンキー犬飼うたり、防護柵の知恵やらなんやらを皆に伝えて、色々取り組んだ。

さらに、ボクは若い方やけん狩猟の免許を取った。銃や罠やな。今はそれが、地域のために役立つと思う。

その恩恵が、自分にも返ってきたということかな。ここで、「田舎料理がおいしいけん来てくださいよ～」たって、誰っちゃん来てくれん。唯一の特徴があるから、来てくれるんよ。それが「猟師のジビエ料理」やな。

我がが猟して、我がが処理施設で加工して、それを来てくれたお客さんに食べさっしょんよ。な！そういうとこ全国的にも珍しいんよ。普通お肉とか出るけれども、それは処理施設から買った肉を使って出っしょるだけでな。

うちは全部一貫して出っしょんで、今日皆さんが来てくれても、顔見よったら分かる。美味しいか？美味しいか？がな。だから食べたら本当のこと言ってな。もっともっと研究するから。ほんで人間って、味には好みあるから。人間の舌ってな、育ちによってみな違うんです。みんな育ちが違うから。みんな違うんですよ。

ボクは料理のプロでないから、新鮮な素材を最適に使うだけで。赤ワインで煮て、こうしてこう、みたいなようせんのでな。とにかく素材そのもので勝負して喜んでもらってます。地域を守るための殺生。そして、生命をいただくというここでしかできない体験教育という価値。



捕獲したイノシシ

民宿「うり坊」

民宿のお客さんには、修学旅行生から、大学の先生から学生からその家族、いろんな人が来てくれるんだけども、人それぞれの満足度が向上するような取り組みをしていきたい。また、「民宿うり坊」の田舎暮らし体験を通じて、この地域の良さ、悪さもあるけど、「ほんもの」を伝えたい。

集落の維持管理で、今までやってきたこととか、思いも含めて伝えて、お客さんに喜んで帰ってもらうような取り組みにしたいと思ってる。

こやって、皆さんと交流することが要は私の生きがいなんよ。老後の生き甲斐。めちゃくちゃ楽しんよ、今。こんな山奥に住んでて、都会からたくさんの人が来てくれる。そんなこと今まで考えたこともなかった。非常に楽しい。今はもう心がめちゃくちゃ楽しい。ええ顔しとるだろ？表情ええだろ？人生めちゃくちゃ楽しい。老後にこんな楽しいことがあってええんかなと思うぐらい楽しい。だから、皆さんも楽しみながら生きていく方法があれば、何でも、めちゃくちゃはかどるし、自分の身になる。人生が楽園じゃ。

ボクも、一度家を出た身、その時は、こんな農家や民宿なんか、そんなことすることになるとは思いもよらんかった。

4、5日前にも、大学の先生が5人来てくれて。年に2回も3回も来てくれるんじゃけど、いろいろ話聞いたりしながらご飯食べて。ここで梅酒作ったんよ。タブレット出して、自宅にいる、京大の有名な教授とリモートで繋いで、こっちの先生5人とリモート飲み会しだした。デジタルの時代やなあ。だからWi-Fiの1つにしても、満足度に関わる。そりゃ、施設が整うてピシッとしてホテルみたいな至れり尽くせりという、そこまでは出来んけんどなあ。



自宅敷地内の食品処理施設

ここでは、田舎だけど通信速度でカバーして、都会に近いみたいな感覚が生まれる。デジタル田園都市みたいな政府の構想があるなあ。うちも今までのリアルを越えた楽園を提供するようなことが、何かできんかと思う。次の夢じゃなあ。

宿経営の苦勞

一般の大人って、1時2時までやっぱり、アルコールするでしょ？ボクたち寝るのは、お客さんが寝てからになるから、1時～2時になる。でも朝食は8時だから、5時に起きないかん。

そこが大変かな。あと、今日明日で、始末せないかん農業ができんようになることがある。そうなると、収穫するものが半減する場合があるわけ。例えば、雨の前に何とか収穫せなあかんあ…と悪いけども、その時、お客さんが来て、収穫しきれなかったことは結構ある。

今年みたいに雨が續くと、もう、作っとるもんが傷んでしまふ、くさってしまう。だから、時期時期でせないかんことができなくなることは、せつかく作ったのに…と思って、ちょっとさびしくなる。まあ、災害級の自然や突発的な客を除くと、来客と農業のスケジュールを調整していくきに、慣れたら結構いけるけどな。



ジビエ料理



ジビエ肉

集落の維持に向けて

ボクの取り組みは、地域活性化を図る、という意味があるんですけども、外部から人を呼びこんで、ここで地産地消してもらう以外に、この集落を維持するのは難しいと思っとるんよ。年寄っとる、獣害がある、畑も荒れとるところが増えてきよるじゃない。そのうち、水、道路も管理できんようになる。

ここで作ったものを食べていただいて、そしてお金を落してもらおう。その積み重ねで、若いファンができて、ここでおってくれる可能性も僅かに上がるだろうし、それによって野菜を作ってくれる人も出てきて、農地も守られ、鳥獣も減らせる。この集落で5～6件、ボクがしよるようなことをしてくれだすと、もっともっとにぎやかになって、変わってくるんじゃないかな？

とりあえずは、楽しくしているということを集落の人に見せることが今は大事やなと、いつか、できる時期がくれば、一緒にやってくれるんじゃないかなと。

幸いして、今ボクここの地域の自治会長っちゅうのをさしてもらんよるだけにそういうことをいろいろ皆さんに、ちょくちょく話していきよるんです。地域の防災とか環境美化というものをテーマにもって。

ちょっと集落上がってきよったら木切っとったんやけどあれも全部、わしが木切る交渉して切ったりな。

ヤマガラって小鳥の世話な。五月に巣箱作りみんなにさして、巣箱をみんなに渡して、餌をやって、どこにでも鳥がくるような環境で、今、月に一回は生態調査をして、第一日曜日の朝8時に皆5分間だけ、ヤマガラなんぼおるかみてもろて、なんぼ生息しよるかな？みたいな。

そういうこともやって、集落を一つにするようなことを仕掛けていってる。ボク一人がやったって集落守っていけんけんね。みんながひとつにならないとね。

「ボツンと一軒家」って、今人気やけども「集落一軒家」になったら、こんなところに住めんわな、人間は弱い。集落に仲間がいるから心強く、助け合って楽しく一緒に生活したいと思える。そういう田舎暮らしの真実を体験してもらおう。

人生は趣味

冬場の狩り「猫」。イノシシとったり、シカとったり。これ元々、地域を守らないかんちゅう責任感みたいなもんしかなかったけれども、いつの間にか、一種の趣味にもなってきて、今、こうやっておいしく食べていただくようなことにも繋がってきとんじゃけどな。

う〜ん、結局、農業も趣味と言えるよ。……つまり、考えたら、生きとること自体が趣味にもなっとるわ。

未来志向

今、ボクが、70年間で培った能力あるだろ？ いろんな経験したけん。これを自分の子どもや孫に、全部植えつけられんかな？ と思う。ほんだらその子はまた、そこから自分で経験を増やしてくじゃん？ そんな遺伝継承ができれば、もんのすごい人間になれへん？ それほんま、先端テクノロジーで研究してくれへん？

世界農業遺産の農法なんかは格段に進化してしまって、貧困や気候変動を無くすかもよ！

[取材日：2021年8月16日・9月23日]



そば打ち体験



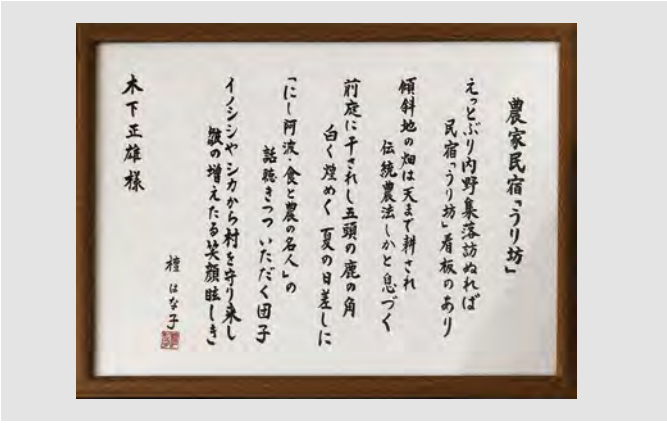
木下さんの功績ともいえる猫の証



民宿うり坊の前にて撮影



手の込んだ最高のおもてなし(笑)「ソツパリ木」



Profile



木下 正雄 (きのした まさお)

◇生年月日：昭和23年1月6日
◇年齢：73歳(取材時)

略歴

鳥獣害被害防止に積極的に取組み、捕獲したシカ肉・イノシシ肉の処理施設を設置し「民宿うり坊」でバラエティに富んだジビエ料理を提供し、消費拡大に寄与している。民宿や体験型教育旅行の宿泊者等を対象に、そば打ち体験を実施するなど、宿泊者との交流活動を通じて地域の活性化に貢献している。



左から 岡部 新大 / 仲村 真奈 / 山口 佳乃

◆ 取材を終えて ◆

今回の二泊三日の活動で初めて聞き書きに挑戦しました。どういった感じで進行すれば良いのか最初は戸惑ってしまいましたが、そらの郷の皆さんや木下さんの支えがあり、なんとか先に進めたと思います。

実際に文字に起こす作業は想像以上に大変なものでした。力不足なところはありませんでしたが、自分達がやるだけの事をやりきったと思います。木下さんの考えや生き方をこの学習を通して多くの人知ってもらえる作品になったらうれしいです。

(岡部 新大)

聞き書きをやったのは初めての経験で少し難しかったです。特に質問するのが難しく最初はあまり質問をすることもできませんでした。名人についてのお話を聞くのは楽しかったです。木下さんのどんな事にも挑戦し続ける姿が印象に残っています。今回、聞き書きをやってみて、知らなかった事を知れたり、たくさんの人に出会うことができたのでよかったです。

(仲村 真奈)

私は、聞き書きをするまで木下さんが獣害駆除をして、それをジビエ料理にして提供しているということを知りませんでした。聞き書きをすることで、今まで知らなかったことを知れたり、人と出会えたりすることができたので、聞き書きをして良かったと思いました。

聞いた話を、文字に起こすのは初めてで大変でしたが、自分が聞いて良かったと思う話を他の人達にも知ってもらうために、頑張る事ができました。

(山口 佳乃)



多少の浮き沈み それも人生 ～山人の里で『百笑一起』の想いと共に～

久保田 正和(徳島県美馬市美馬町)

聞き手：秋田 紋花 / 藤河 千智 / 森 花音(徳島県立池田高等学校辻校 総合学科1年)

= ！子ども時代から中学校卒業まで =

子ども時代

子どもの頃なあ、まあ農作業やは、中学校とか小学校の高校生のときには、農作業の手伝いしたりしよったからな。

大変っていうか、遊ぶ時間がなかった。放課後がない。忙しい農繁期とかは、学校終わったらすつと帰ってきて、手伝いする。それが自然じゃった。みんな、周りも。小学校の頃の遊びは、めんことか、ビー玉とか、ほれから、竹馬とか、缶蹴りとかもした。近隣に子どもがいっぱいおったから、新聞紙を丸めてぐるぐる巻きにしたソフトボールみたいなもん作って、チームで対戦したりとかしよった。新聞紙で作ったボールだったら、手で打てるでえな。バットでなしに。そんなに飛ばんけん、広い場所がいらん。我々のチームは「丘の上ホームーズ」って昔ドラマにあった名前付けとった。我々の子どもの頃は、遊びを作っていった。山へ入ればターザンしたり、ブランコも自分で作り、遊びとしては…そうやね。他にないから。テレビが入ったのも中学校くらいになってから。近所の学校の先生の家に、こゝろで初めてテレビを買った。そしたら、もうみんなが同級生とか誘い合わせて、行ってみせてもらふんよ。相撲があるとか、プロレスがあるとか言うたら。今考えてみたら、迷惑やったろうなあと思う。ただこっ

は見たい一心で。「快傑ハリマオ」とか、夢中で見た。

三頭の廻り踊り ～香川との交流～

旧の8月26日には、三頭神社で廻り踊りがあった。神社の境内の真ん中で、火たいて、音頭出しさんがおって、周りをぐるぐる踊って廻る。香川にも踊りや唄があって、山越えにこそって来るんよ。まだ、道路が通ってないときからな。んで、香川の踊りとこっちの踊りを披露しあったり、一緒に踊ったりした。そういうように、香川とは古くから交流があったんよ。人出も多かったし、盛大にやんりよった。子どもの時は、それがひとつの楽しみだった。



三頭の廻り踊りの様子

家族で分担 ～子どもがする仕事～

子どもの頃家で作りよった作物は、タバコ、大麦。タバコが主で、大麦とかいうのは、春作として、秋に蒔いて春取り入れる。その間にタバコが入っていく。昔は、家族で仕事を分担して、それをそれぞれが担うっていうやり方じゃったんよ。タバコの「芽かき」っていう作業があって、葉の所から芽が出てくるんじゃけど、それを伸ばすと葉に力が伝わらんけん、それは取っていかないかん。そういうのは子どもでもできるやないかと。家族で分担がちゃんとできとった。

収穫したタバコの葉っぱを吊るのも、子どもの仕事じゃった。持って帰ったタバコの葉っぱを縄に編んで、高いところに吊り上げて乾燥させるんよ。今は近代的な乾燥機ができたけん。昔は、二人で両方で縄を引っ張り合いて、高いところに上がって、吊りこんでいく。こういう高いところに上るのは、子どもにさされた。タバコの葉を縄に編み込むときも、1連について5円の編み賃くれるつちゅうけん、子ども心に一生懸命やった。けど、結局それは嘘なんよ。こうやって、農作業のいろんなところで手伝いさされた。

やっぱり昔は各家庭に子どもがおったもんじゃけん、労力として頼ってた部分もあるとは思。

子どもが主力のともあるしな。そういうところは、子どもがおらんかったら、なんもできん。

親父の手伝いで、牛を引いたりもしたなあ。まあ、それは高学年になってからじゃけど。親父が牛に取り付けた犁(すき)※1を持ってって後ろから耕していく、その前で牛の鼻の頭にあるやつ、鼻子(はなご)※2って言うんじゃけどな、そこのところをわしが持つとくんよ。で、それを引っ張って行って牛を先導するんよ。慣れて牛を使えるようになったら、いろいろな動作、右行け左行けってことをできるんじゃけど、できんときは、鼻子を持って、ずっと引っ張って行く。そういうのをしよった。

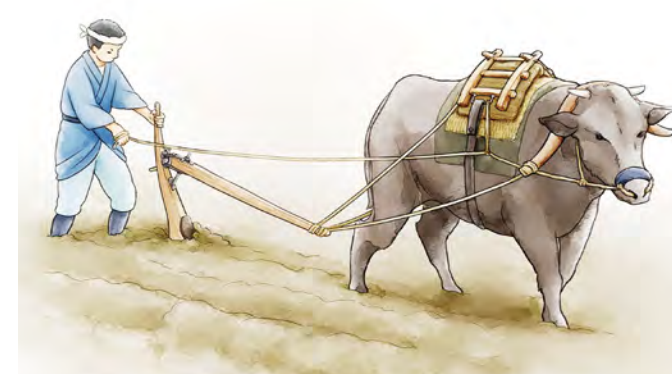


※1 犁(すき)

「借耕牛」

昔は三頭峠を越えて、香川県と「借耕牛」っていうのをやりよった。ここの畑はどこも傾斜地で、トラクターとかそういうのもない時代じゃけん、どこの家も一頭ずつ牛を持とったんよ。

畑を耕すときに、牛を使うて犁でするんやけど、その牛を田んぼ時期に貸すわけ。こっちの牛を連れて行って、向こうの人に渡してこっち帰ってきて、また時期が来たら牛を連れに行くと、お礼にお米もらったり、お金もらったり。地域全員がしよった。向こうにも世話人があって、どこそこの田んぼにはここの牛を、どこそこの牛はここここが共有で借りる、とかいうて。そういう牛が行き来する街道じゃった。そういう「借耕牛」も、わしが中学校3年の時ぐらいが、最後じゃった。その時自分でも、わしが最終の牛追いかいになって思ひよった。そういう時代じゃった。



※2 牛の鼻周りについている物が鼻子 朝日町歴史博物館より引用



ご友人の逢坂さんも交えてお話中



庭からの眺めはとても素晴らしい

＝ II 中学校卒業から50歳頃まで ＝

人生の転機 ～浮き沈み～

70年も生きよったら、多少は浮き沈み、波風はある。人生の転機みたいなもんもあったよ。

中学校卒業で大阪の方へ就職した。ほんで大阪の会社の支社が徳島の美馬にできたもんじゃけん、そこへ帰ってきたんよ。ほんで、ある程度して、また大阪の本社の方へ行って、それから、20歳ぐらいで、もう農業するって辞めて帰ってきた。農家の親父のところで農業するのは、えらい辛抱があったんよ。

金くれへんし、小遣いはないし。それでも友達は飲みに行かんかって言うし。

出稼ぎ

23ぐらいから50歳ぐらいまでは、タバコを主として、農業ができん冬の間は、出稼ぎ。この辺の男の人は全員出稼ぎに行きよった。大阪の方へ、毎年ね。会社の寮で寝泊まりして。

高度経済成長で需要もある、生産も能力がまだ足らんから、人をようけ受け入れよったんじゃ。田舎もだんだんと車の社会になっていきよって。土木工事にしたってな。高速道路ができたしたり、オリンピックじゃ、万博じゃって言うて、一気に持ちちやがって行きよった時代だったんじゃ。1日働いたら、その働いた分だけ現金で受けとりよった。

5ヶ月なり、6ヶ月なり、そんだけ働いて帰ってきたら、その金で生活できるんよ。家の農業はじいちゃん、ばあちゃんがして、若いのは出稼ぎに行く。ほんで出稼ぎから帰ってきたら、即農業の方へ力入れていくっていう。それが当たり前の時代だったんじゃ。

管理下のタバコ栽培

タバコの葉は2種類ある。在来種の阿波葉は、刻みタバコ用。黄色種は紙巻き用。タバコは、ここの基幹作物なんでね。八割の農家が作りよったんで。中山間の傾斜地でやりよるけん、労働としては重労働なんよ。大面積ではできん。

公社の人が全部畑を確認して、タバコの株の本数を完全管理しとったんよ。一反(たん)(約10アール)に2,200本とか決められとって。この畝には何本、この畝には何本って全部。

ほんで見に来て、多かつたら全部抜かされる。民営化になっても、管理は厳しかったな。ほなけんど、タバコは必ずお金になる。全盛期には我々も、それで食べていけよったんよ。

タバコと大麦

タバコと平行して、早く取れるものとして、大麦を作りよった。11月に麦まきして、冬越して春に麦が大きくなりだしたら、その中へタバコを植えていくんよ。ほんで麦刈りしたら、すぐにタバコの方の手入れをする。現金収入がどうしても欲しいから、別もんにすれば、両方を取れる。一つの畑で畝を分けていくん。秋、タバコ収穫の後は、だいたいソバ。後作。ソバっていうのは、だいたい60日から70日ぐらいで収穫できるから、8月のお盆後に蒔き付けしても取れる。それぐらいまでにタバコを取り上げる。

タバコを作りよる間は、この時期には何の作業をやるって、もう決まっとった。例えば、急に台風が来て、タバコの葉っぱがなくなったとかなると、もうお手上げ。ソバの収入っていうものはそんなにないんよ。収穫量が少ないもんで。

タバコ栽培の転換

けども、政府の方針で、JT(日本たばこ産業)っていうのが、健康のためできるだけ吸わんようにとかいう方針になってきて、耕作面積を減らされるようになった。消費もだんだん無しになってきて。地域がバサッと首切られたような状態。時代の移り変わり。ほなけん、農業の転換期って、ものすごい苦労した。タバコがすんでから、次の作物に転換するのに、2～3年ちゅうのは、全然、金は取れんかった。何してええか、分からんかった。

大根 ～畑の循環～

それから、どんどん生活が多様化されて、野菜の需要が高まってきた。大根は徳島県で、うちのが20年ぐらい占めとったんよ。地域の運送屋さんがおって、徳島市の青果市場まで運んで、さばいてくれよった。タバコより、よけ取れよった。

タバコをしもって、畑に肥料、ほれから堆肥、いろんなものをしていくもんじゃけん、野菜が上手くできよったんよ。山の落ち葉とか。草を刈ってきて敷草にしたり。そういうのが、雑草をおさえたり、雨が降ってもぬかるまんようになる、今の言うマルチ効果じゃな。そういうんで循環させていきよったら、土が肥えてきて、やっぱりいい作物ができる。

それでも、野菜じゃけん、どうしても価格が変動してしまう。タバコと野菜とのローテーションが、うまいこといったら、金にはなる。ここは準高冷地じゃけん、ある程度の出荷量もあつたりして、うまくできよった。

＝ III 50歳頃から現在まで ＝

「太陽マーケット」の創設 ～一番の転換期～

一番の転機は、50歳ぐらいのとき「太陽マーケット」を立ち上げたこと。それは三頭トンネルができて、香川と直通になったことが大きい。それが人生で言う、大きな転機かな。

「太陽マーケット」を始めようって言い出したのは、わしでな。せっかく三頭トンネルで香川まで繋がったけん、ここで人の流れを止めてやらんか、なんかやろうよって。

取り敢えず、地域の中心になる人に声かけていくんよ。それで一緒にやろうかっていう人を集めていくわけよ。そうやって集まった人らで「百笑一起」っていうグループを作って。そうやってしていきよるうちに、また違う子が興味持って、一緒にやろうか、とかいうように増えていくと。

「太陽マーケット」をやろうとする時は、みんなで一緒に何かやる、っていう勢いみたいなのがあった。始めはバラックでな。みんなに手伝ってもらって、山から木を切り出してっていうのをして。ほんでしょったら、どんどんアイデアが出てくるんよな。

コロナの影響で、この前1ヶ月余り閉めたときには、活気が無しなってしまうて、みんな落ち込んだった。集まる場所が無くなって。今「太陽マーケット」は、地域の情報の発信源だったり、憩いの場だったり。すごい大事な場所になっとんちやうかな。



太陽マーケットの中で説明を受ける



三頭トンネルの出入り口付近にある太陽マーケット

「山人の里」の創設

「太陽マーケット」ができてから、20年ぐらいいしてから「山人の里」ができた。「山人の里」ができたきっかけは、休校になった重清北小学校を、どうにか利用できんかつちゅうので、宿泊体験施設みたいなのをやろうかってなったことかな。

各自治会にとりまとめてもらうて、いろんな人から意見集めて、話おうて決めたんよ。「山人の里」と同じ敷地の中に、この地域の集会所みたいなのも一緒にあって、複合施設として校舎を活用していきよるんよ。全体で「山人の里」が管理をまかされとるけん、上手いこといけよる。「山人の里」に来てくれた人が、山歩きするとかバーベキューするとかで、人手が必要になったら、「山人の里」が地域の誰かにもお願いして手伝って貰うたりもしよる。敷地内にピザ釜があるんじゃけど、ピザ焼くとなったら、自分とこの野菜持って来てくれるしね。地域の人たちが、自分たちで作った農作物を活用して、お客さんと直接接する場として使えるのがいい。

「山人の里」「百笑一起」名前の由来

「やまんと」っていう言葉は、山子(やまご)っていう意味。山の子と書いて山子。山の上のもんが平坦へ降りていって、知らんことがあったら、「やまんとやけん、知らんのや。やまんとが。」って言われよったんよ。あんまりいい意味ではない。「やまんと」っていう名前をつけたときに、何人かは、首傾げたわ。

ほなけんどな、わしらの親父みたいな人がおって、その人が「ええ名前でないか」って。言葉の意味を逆手に取ったんよ。

逆手に取るっていうところは「百笑一起」にもあるんよね。百人が笑って、一つ起こす、という部分は、みんなでふあーふあー言うて、酒酌み交わしもって、笑顔で一つ一つ考えていこうよ、っていうのが「百笑一起」の名前の由来。



山人の里

野菜づくり

今の農業のメインは、野菜を作って売る。ある程度の量を作れば、市場で売る。少量多品目で、所属しとる産直が何軒かある場合には、もう、当然産直で売る。我々も嫁はんと夫婦二人でしよるもんじゃから、1人が配達に出たら、1人の重労働になってしまうんで、畑をいつまで維持できるかは分からん。

ただもう、今度は高齢化になって困っとる。後継ぎがなかなかおらんよ。経営していく人がおらんようになる。一人でしてもかまわんけど、手伝ってくれる人が隣におるとか、トラクターでひいてくれるとか、そういう人がおったら、どうにかできる。ほなけど、そんな人がなかったら、ちょっと難しい。だんだん力が落ちてくるけん。これはもう仕方ない。



傾斜畑



みまから

修学旅行生の受け入れ

修学旅行生は5～6人、受け入れよる。春は関西の方から中学生、秋は関東からも、高校生が来る。ここの集落全体では、40人くらいを受け入れよった。今はコロナでお休みしとる。

修学旅行生が来たときには、宿泊体験であったり、農作業体験であったり、ほれから、その家の料理を一緒に作ったりする。まず最初は、生徒みんなと話をする。お互いに自己紹介し合ったりして。子どもと話をして、どんなことをするか決めていく。そのときの季節におうたことを、その時々を考えてするんよ。

夏の暑いときなら、流しそうめんでもするかって、朝から竹を切りに、竹藪に入っていったり。ほんで、昼にそうめん食べて、午後は農作業するとか。

農作業を都会の子に教えるのは難しい。農作業はちょっとしたら、すぐたってくる。ほなけん、飽きささんように、次々と目先を変えてやる。山で葛(かずら)を見つけたら、ターザンの仕方を教えるとか。みんな喜んで帰ってくれるわ。コミュニケーション取れんなら、来てもらう意味が無い。前に1回、生徒が帰った後、部屋見に行ったら、窓ガラス割られて、無かったことがあったな。

祭りの伝承

今は人との繋がりを実感出来る機会っていうのが減ってきとるけんね。この地域のお祭りもそうじゃけど、地域全体を挙げてっていうのが無くなってきとる。頭屋さんとか、総代さんとか、限られた人だけが行ってするようになってしもとる。そうなると、どうしても盛り上がりには欠けたした。

廻り踊りも学校でししたらな、最初は地域みんなが集まってしよったんやけど、だんだんと別の地域の人の方が多くなって、地元がおらんようになったんよ。そういう行事とかの維持が難しくなってしまうて、廻り踊りも無くなった。大勢で集まって何かするという自体が出来なくなってきてるん。



お祭りの様子

後継者がおらん 管理するだけじゃない

気かけなんたら、なんもできんと思う。「山人の里」も「太陽マーケット」も一緒に思うけん。気にかけて、みんなが何かせないかんっていう気力、気持ちがあったけん、ある程度こうできてきた。これからどういうふうになるかは、わしらも分からん。ほんま、めんどいんよな。

どんどん歳が上がるっていうけん、周りもおんなしなんで。若い子が入って、とか言うんだったら、我々も活気づくというか、安心感が出てくるんじゃないけん。同年代前後がやっぱり、そのままの状態に進んでいくっちゃうのは、ものすごい不安感がある。というか、どこで潰れるんや、これっていう。もう、みんなで励ましあいよ、今は。

「山人の里」の管理を任せられる人なら、次々おるんよ。んでも、「太陽マーケット」の方は、管理だけではいかんのよ。ただ行って座るだけでは、何の意味もないし、作物を作って出してっていうだけになる。この地域だからこそ、維持できよるんよな。みんなが知恵を出し合って、地域が主導になって形になったからこそ、今に繋がっとるんよ。我々の北校区は、要するに一致団結派じゃけん。

[取材日：2021年8月24日・9月25日・10月16日]

Profile



久保田 正和 (くぼた まさかず)

◇生年月日：昭和23年11月22日

◇年齢：72歳(取材時)

略歴

みまから、ソバ、豆類、トマトなどを栽培。廃校を活用した体験型宿泊施設「山人(やまんと)の里」の運営委員会委員長として、都市住民との交流と地域の再生に取り組み、農業体験、そば打ち体験等の各種メニューを提供している。産直市「太陽マーケット」、そらのそばを提供する「三頭(さんとう)そば処(どころ)竹酔日(ちくすいじつ)」と連携し、地域全体の所得向上に貢献している。

◆ 取材を終えて ◆

聞き書きを通して、人との繋がりの大切さに気づきました。困った時にはお互い様で、その時は辛くても、後々良い結果として自分の元へ返ってくる、ということを学びました。また、久保田さんの諦めない精神も、本当にすごいと思います。私はすぐに諦めてしまう癖があり、失敗するのが怖い、周りに迷惑をかけたくないと思い、なかなか行動に移せないことが多くありました。久保田さんの話を聞いて、失敗を必要以上に恐れる必要はないと勇気をもらえました。久保田さんが周りの人達から慕われているのも、すごく納得が出来ました。

(森 花音)

久保田さんのポジティブな考え方が印象に残っています。百笑一起を立ち上げたときのお話で、たくさんの人と関わり、アイデアを出し合って行動に移していく様子は、とても興味深く、聞いて楽しかったです。このような久保田さんの人柄が地域のの人に伝わり、さらに団結していったのだと思いました。

聞き書きをして、私自身とても成長できたと思います。昔のことにも興味が湧いてきました。昔のことを過去のこととして無関心でいるのではなく、今の生活は昔の生活からずっと繋がっているのだということを忘れてはいけないと思いました。そして、私も自分の家族のこれまでの生活について、聞いてみたいと思いました。

(藤河 千智)

久保田さんの子どもの頃の話は、今の私たちの生活とは全く違っていても驚きました。ユーモアを交えて話してくださったので、とても楽しかったですし、昔のことに少し興味が湧いてきました。聞き書きをしてみて、文章を書き起こすということは、想像以上にとても難しいと思いました。久保田さんのお話の中には、難しい言葉がいっぱいあって、本当に苦労しました。でも、いろいろなお話を聞けたので、とてもいい勉強になりました。地域のために何かをすることは、素晴らしいことで、久保田さんの地区の人たちのような活動を、たくさんの人に伝えていきたいと思いました。

(秋田 紋花)



左から 森 花音 / 藤河 千智 / 秋田 紋花



みんな大好き安藤さん

安藤 洋子(三好郡東みよし町西庄)

聞き手：桑岡 優李 / 美馬 李音(徳島県立池田高等学校辻校 総合学科1年)

おばちゃんの若い頃

おばちゃんは、若いときには神戸まで出て行っとったんよ。中学校まではこの近くの学校へ行行って、こんな山にありたくないと思って、高校は徳島市内の定時制高校へ行ったんよ。高校を卒業して神戸へ行行って、介護関係の仕事をしよったんよ。でも、22歳の時にこっちに帰ってきて、花嫁修業してた。それから結婚して、ここで農業を手伝い始めたんよ。一度は都会に出たけど、結局田舎暮らししてる。やっぱり自然の中が一番いいんかな。離れてみてやっぱり、田舎の良さが分かるというか。

おばちゃんの性格

ほうやなあ。子どものときの写真見よったら、笑っとる写真の方が多いなあ。だけん、明るかったんかもしれん。でもな、寝たら新しい朝が来ると思たらいいなよ。過去を忘れてな。でもやっぱり、1つずつ自分のしたことに自信がついてきたら、余計前向きになれるんじゃないかな。ほなけん、小さい目標立てたらいいなちゃうん。ほんで達成したら「あ。私できる子」ってな。大きな目標ってなかなか達成できんけん、達

成感ないでえな。まあ、ネガティブにならんっちゃうことは、根が明るいんだろうな。ほんで、隠さんのんよ。自分の悪いところもええところも、全部出してしまうから。

おばちゃんの日常 ～買い物～

この辺にはスーパーはない。おばちゃんの食料品の買い物は、もうマルナカさん。おばちゃん、びゅーーーーーって行ったら10分くらいで行くから。コロナになって、降りて行くことが少なくなったから、皆さん一週間分とか買いだめしながら。まあ、野菜やそんなのは全部あるから。子どもたちが下から上がって来るときは、「コンビニもなんもないよ」って言うて、上がって来さず。ほなけん、「おばちゃんが出したもんを食べなんだら、食べれんよ。」「買いに行きたかったら行ってもええけど、往復2時間かかって歩いて行ってきいよ。」って言うたら、「怖いからよう行かん」とか言いながら、いつも笑うてます。

おばちゃんの日常 ～車～

でもまあ、普通に生活する分には困ることはない。車さえあったら。だから、だいたい車は1人1台じゃないんよ。おばちゃんちには、おじちゃんとおばちゃんが持つとって、畑用もあるんよ。畑用も、大きいトラックと、ちっちゃいトラックと。維持費はたいへんだけど。でも、こういう自然いっぱいところで、空気もきれいな、水もきれいなところでできたお野菜の取れたてが食べれるという利点はある。



安藤さん家近くの高台から眺めた景色

民宿「安藤(あんちゃんち)」を始めたきっかけ

民宿を始めたきっかけは、最初、町からの働きかけがあったんですけど、おばあちゃんの3年の法事終わったぐらいに、ああほな、やってみようかなと思って。あとまあ、子どもたちと会うのが好きじゃけんかな。自分の子どもが大きくなったから、今度はよその子どもと接しようって。

民宿に来る子は、だいたい中学生、高校生。中には大学生っていうのもたまにある。海外から来る人は一般人とかな、大人になるんかな。

最初始めたころは、2泊3日が多かったんですけど、この頃子どもたちも忙しいんか、1泊2日がいふ多くなりましたね。2泊3日おって下さったら、いろいろな体験がゆっくりできるから、それが一番いい。

1泊では、慣れたところに帰るから。だから、作業内容も簡単なものに、なってしまう。畑の仕事でもね、ほんま、かいつまんでするから、子どもたちに農業の本当のしんどいところは伝わらんのかなって。

民宿でのさまざまな体験活動

昔は2泊3日だったから、道路作業みたいななんもしてたんですよ。道の落ち葉を一輪車に入れて、軽トラで持って帰ってきて、畑に入れてもらうっていう作業を一日かけてする。そしたら道路もきれいになるし、畑も喜ぶっていう形で。それもまあ、農業遺産として昔から伝えられた土壌改良の方法なんやけど。1泊になったら、そういうことができないから、もう、苗を、1人に3本から4本ずつ置いて、植えてもらうとか、種まきとか、ほんと簡単な作業しか出来ん。後は、食事をメインにして、竹細工で、自分の箸と器を作ってもらって食べるっていうふうにしたら、お土産にもなるし。そのときに一番会話が出来るから。作業より会話を重視してる。



民宿「安藤(あんちゃんち)」前で記念撮影



庭先から自然を眺める

民宿での農作業体験

食事作るから野菜取りに行こうって、籠持って、鉢持って行くんやけど、畑行って「さあ!ピーマン取ろか。」って言うたら「ピーマンどこにあるん?」って言うんよ。

目に見えとんよね。ほなけど葉っぱが多いし、ピーマンが見えてない。そういうところから教えなあかん。

玉ねぎ取りに行つて、玉ねぎの土から上のところは、ねぎじゃないですか。それが分からない。

下に白い玉ねぎがあったときに、「白いけん、これは玉ねぎちゃう。」って。玉ねぎは初めのうちは白いじゃないですか。茶色い皮の玉ねぎしか知らないから、新しい玉ねぎの、畑にある状態を見てないから。

「えー!玉ねぎってこんなだったん!」っていう感じで。

やっぱり、子どもたちも体験するのが初めてやけど、私たちは、それを知らないっていうことが、逆に初体験でした。

普通と思ってることが全然違うんよね。スーパーで売ってる状態のものしか見てない。畑にある状態、これを教えなんだらいかんのやなって。子どもたちが来たときには、こういうことを教えるのに重点を置こうって思う。

体験でも、まあ1週間ぐらい来てくれたら、農作業のたいへんさも分かってもらえるだろうけど、1時間や2時間の農作業で伝えられるもんは少ない。それよりは、作物の成長過程とか、そういうなのを見せる方がいい。



ニワトリとタマゴ

民宿をやっていると思うこと

おばちゃんの生きがいになったかなと思う。人が好きで、人に会って話するのがとっても好きなんよ。おばちゃんは、目を見て話しながら、下を向いたり、横向いとる子に話しかけるん。一言でも喋ってくれたら、そこからコミュニケーションが広がる。そうしよる内に、そういう子の方が、後で自分のこと話してくれたりする。他人だから言えることもあるからかな。そこまで関係が作れたら、やったなって思う。

黙一とつたらな、あの子何考えとんだろかって思うじゃん。だから出来るだけ、喋るようにしよう、恥ずかしくても。だんだん、喋れるようになるから。

でも、今コロナでちょっと休まさせていただいてるんやけど、子どもたちに会えないのが辛いというか。

今年2年目だったからちょっと慣れてきたんやけど、なんか物足りないというか。早く収まってほしい。



民宿経営の経験を話す安藤さん

「桃ちゃんトマト倶楽部」とトマト栽培

「桃ちゃんトマト倶楽部」は、平成18年から13年続けて、もう終了しました。ケチャップとたれと、ポン酢と、ジャムも3種類、作ってたんよ。自分たちが作ってるトマトだけで作ったもの。中山間って言って、400メートル以上のところで作ったトマトは、甘いんよ。平地で作ったのと、味が全然違うんよ。糖度も高くておいしい。

でも、だんだん、自分たちの生産量が減ってきて、原料の確保が難しくなって来たんですよ。皆さん、だんだんと歳を取ってくるし。私が一番若くて、なかなか取れなくなったの。

うちは、大きいトマトを150本、ミニトマトを600本作ったんですよ。ほたら、今年は雨が多くて、トマトが青いときに、霧が入って割れるんですよ。でも赤くなったら収穫せなあかん。でも収穫しても、全体の3分の2は放りました。筋が入ったトマトは、おいしくても商品にならないから。ミニトマトだったら、ヘタが取れただけで、売り物にならない。今日加工すれば使えるものを、捨てないかん。

ほなけん、今までは、こういう規格外のトマトを、放るのはもったいないっていうんで、冷凍して置いて、「桃ちゃんトマト倶楽部」で、ケチャップにして売んりよったんやけどね。もう今はそれがなくなったから、捨てるしかないなって。



おいしくても筋が入ってしまうと破棄になる

サロン活動 ～新聞バッグづくり～

ここの桑内集落の皆さんと、サロン活動をしてるんやけど、その活動の一つとして、こういう新聞バッグ作ったりしよるんよ。新聞バッグの作り方教えてもらったら、自分だけのものにするんじゃないかって、これを部落に持ち帰って、お年寄り呼んで「今日は新聞バッグ作りますよー」って、皆で作ってその日一日楽しむ。ほんで、こんな感じで作って、ストックしとくんよ。

これにね、野菜とか入れてあげるの。喜んでもらえるよ。その時新聞に載ってた中学生のスポーツ記事とかを表にできるようにして。ほんでその人にあげるんよ。「お孫さん載ったよー」みたいな。そして鞆になったら違うでえね。

こういうのもまた会話のきっかけになるでえな。それも繋がりでえな。

やっぱり、こういうのって、リデュースやSDGsにも繋がるとる。ほなけど、それって、昔からしてきることなんよな。

持続可能なって言うけど、昔の人はしよったんよな。昔は使い捨ての時代じゃ無いんよな。

私は子供に自分の服を壊して作って、着せてやつたりしよったけんあ。ほなけん、そういうことは、やっぱりちっちゃいときからの積み重ねよね。急にしていけるもんではないと思うんよなあ。

だけん、じいちゃん、ばあちゃん、先生、大人たちの言うことはな、悪いことではないと思うけん。

私も、子どもの時は聞つきよらんた。でもそれが、大人になったときに「もったいない」って気持ちが出てくるんよね。それが大事かなあと。そういうのがSDGsにも繋がるし、食育にも繋がるし、色んなものに繋がっていくと思う。



トマトの収穫

「手話サークルみかも」

今、一番大事に続けよんのは手話サークル。困ってる人たちの横でおれる人になりたいなと思って。自分がそうしよったら、自分にも横におってくれる人ができるんよな。なんか、助けてくれる人って、おるんよな。そういう人間になりたいなと。皆さんにもそういう人になって欲しい。自分が自分がって言よる人は、意外と友達が少なかったりする。気持ちの繋がりを大切にしたら、助けてくれる人が多くなると思う。それはどこにおっても同じじゃと思うんよ。

おばちゃんは、若い頃会社におって、嫁に来て、子育ての間しばらくは、この家の世界だけにおった。子どもが学校に行きだして、やっとお母さん方との繋がりができた。

そこで、いろんなことに積極的に手を上げて行っきよたら、人の輪が出来てくる。その場、その場で、与えられた仕事して行っきよたら、人との繋がりがどんどん広がっていく。友達が増えていく。助けてくれる人もできるんじゃと思う。だから、嫌なこと、嫌いなことも、自分から積極的にやった方がいいよ。

世界中の人たちとの コミュニケーションの取り方

会話はできないの、おばちゃんは。でも、身振り、手振り、今は文明の利器があるから。

おばちゃんはあんまり操作できんけど、相手の子どもに、「スマホ出しな」って言うて、こういう形で。でも、気持ちがあったら通じるもんなんよな。心さえあれば通じるかな、っていつも思いながら……。よっぼど難しい説明、昔のこととかを説明するときは、絵にかいてするんよ、汚い絵じゃけど。



たくさんのじゃがいも

若者へのメッセージ ～友達を作ろう～

たくさんの人と関わる上で大切だと思うことは、常に笑顔で壁を作らないこと。自分のおばちゃんどこに来たっていう感じが、子どもたちに伝わったら、話も弾むじゃない？そんな感じを一番先に心がけとるかな。

おばちゃんは、仲間作りは上手なんかもしれん。
こんな仕事してたら、たくさんの人が集まってきてくれる。
困ったときは、誰かが助けてくれる。

だから、みんな、友達はいっぱい作っとった方がいいよ。
人生の中で、どれだけたくさんの人に会えるか、それがその人の幸せに繋がるんだって。10人しか会えない人は、10人の幸せしかもらえない。100人の人と会えたら、100人の幸せをもらえる。だから、いっぱいの人と出会って、お話をする。
ちょっとの時間でも。いろんな人と。一人一人全然違うから、何か1つ勉強になるんよ。

[取材日:2021年8月27日]



ビニールハウス



メロンがいっぱい

Profile



安藤 洋子 (あんどう ようこ)

◇生年月日:昭和33年1月18日

◇年齢:63歳(取材時)

略歴

トマト、豆類をはじめとする多種多様な作物を栽培。教育旅行の受入れに積極的で、一般社団法人「そらの郷」の副理事長を務めている。農林漁家民宿「安藤(あんちゃんち)」の宿泊客を、傾斜地の農作業体験や野菜たっぷりの郷土料理でもてなし、ふれあいを楽しんでいる。女性起業グループ「桃ちゃんトマト倶楽部」を立ち上げ、6次化商品づくりにも取り組んだ。



左から 美馬 李音 / 桑岡 優李

◆ 取材を終えて ◆

安藤さんは、元気で明るい方だったので、話を聞くのがとても楽しかったです。民宿には、世界中の人が来ていると聞いて驚きました。また、「困っている人の横でおれる人になりたい」とおっしゃっていたのが、一番心に残っています。私も人の立場で考えられる人間になりたいと思いました。

聞き書きに参加してみて、一番難しかったところは、文章に書き起こす作業です。話をしているうちに、いろいろな話題に変わっていくので、それを上手にまとめるところが難しいと思いました。また、楽しかったところは、ペアの友達と構成を考えながら、文章をまとめたり、小見出しをつけたりしたことと、たくさんの人と関われたことです。いい経験になりました。

(美馬 李音)

私は今と昔の違いについて改めて感じました。昔はものを大切にしているいろいろなものを再利用していたそうです。昔の人は、生活の中でいろいろな経験を積み、技術や才能がある人、何でもできる器用な人が多いのではないかと思います。

また、人との関わり方も学びました。安藤さんは、民宿を経営するだけでなく、地域のさまざまな活動にも積極的に参加しているいろいろなことを成し遂げています。

「たくさんの人と上手に関わるためには、笑顔が大事。」「自分を隠さず、思っていることを言葉にすることが大事。」と、おっしゃっていました。

私もこれからいろいろな人と会う中で、今回学んだことを活かし、よい人間関係を築いていきたいと思います。

(桑岡 優李)

グローバルー インポート アグリカルチュラル
G:Globally (世界) **I**:Important (重要) **A**:Agricultural (農業)
 ヘリテイジ システムズ
H:Heritage (遺産) **S**:Systems (システム)

「世界農業遺産」とは、世界的に重要かつ伝統的な農林水産業を営む地域を、国際連合食糧農業機関 (FAO) が認定する制度。世界で22ヶ国62地域、日本では11地域が認定されています (令和3年11月現在)。
 「にし阿波の傾斜地農耕システム」は、2018年3月に「世界農業遺産」に認定されました。

にし阿波の傾斜地農耕システム



世界が認めた5つのポイント!

- 食と暮らしを支える**
食糧および生計の保障に貢献するものであること
- 生物と植物の宝庫**
世界的に重要な生物多様性および遺伝資源が豊富であること
- 伝統と自然を守る**
伝統的な慣習や技術、天然資源などを維持するものであること
- 風土に根付いた文化**
文化的独自性が風土や地域に定着、帰属していること
- 人と環境が調和した景観**
長い年月を掛けて培ったランドスケープを有すること

「にし阿波」と呼ばれる徳島県西部の美馬市、三好市、つるぎ町、東みよし町には、標高100から900メートルの山間地域に200近くの集落が点在しています。いずれも急峻な傾斜地に位置し、場所によっては斜度40度にもおよびます。斜面を利用する農業では、段々畑のように平らな面を造成することが一般的ですが、これらの地域では傾斜地のまま農耕を行ってきました。そのために、独自の技や知恵を培って、自然を守り、生命を守り、集落を守ってきたのです。この400年以上にわたり継承されてきた山村景観や食文化、そして農耕にまつわる伝統行事などの全てが「傾斜地農耕システム」です。このシステムは、未来に向けても持続可能なものと認められ、食と農の危機的状況や生態系の破壊など世界が直面する問題解決にもつながるものと評価されました。